
POP TUNE

roody

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

POP TUNE

【Nコード】

N7467Q

【作者名】

roody

【あらすじ】

初恋の彼に浮気されたことが原因で、恋をすることが怖くなってしまったユカ。それ以来恋を避け続けてきたにもかかわらず、会社の後輩・崎田に告白され…

恋に不器用な女子と案外純朴な男子のポップな恋愛ストーリー。

(1) さよならなんて云えないよ

告白してきたのは彼のほうだった。

動悸が激しくて、緊張が度を越していたんだと思うけど、顔を真っ赤にしてふるふると震える彼に「付き合ってほしい」と言われた。

生まれて初めて告白されたことで私も緊張してしまい、つい「いいよ」と言ったのがきっかけで、

私たちは付き合い始めた。

中学三年の春だった。

本気の恋愛とか、真実の愛とか、言葉は知ってるけどあまりピンときたことがなかった。

でも、自分では気づかないくらい彼のことを好きになっていたと知ったのは、

彼と別れることになった時だった。

彼と付き合い合って半年が過ぎたとき、彼の浮気現場を見てしまった。髪長い女の子とふたりで腕を組んで歩いているところを。

彼は笑っていた。

私は呆然とその場に立ち尽くしてしまい、しばらく動けなかった。こちらへ向かってくる二人が私に気づいたとき、我に返って走って逃げだした。

彼が私の名前を呼んでいた気がする。でも、呼んでいたかどうかはわからない。

それ以後、私は彼と連絡を取っていない。何度もかかってきた電話も、送られてきたメールも、すべて無視した。

理由はただ一つ。

怖かったから。

彼に嫌われて、別れをつきつけられるかと思うと怖くてたまらなかったから。

私はあの時、真実から走って逃げだしたのだ。

絶えず動くコピー機の音とあちこちで飛び交う事務的な連絡で、オフィスはいつも騒がしい。

その日、私は午後にプレゼンを控えている企画のチェックに追われていた。

新人アイドル歌手のプロデュース戦略についてのプレゼンは、今回で二回目。

前回はベテランの竹淵部長がほとんど枠組みを作ってくれたけれど、今回は最初から最後まで一人の仕事。

だから実際は、今回が初めての大がかりなプレゼン。

ともすれば社運がかかっている今回の仕事で、安易な失敗は許されない。

私は今までにない緊張感に見舞われ、胃が溶けそうなほどの胃酸を感じていた。

（ああ…お腹痛い…）

机に突っ伏しそうに前かがみになったところで、突然後ろから肩をたたかれて体が跳ね上がった。

「ひっ！！！！！」

「ユカさん、元気ないんじゃないすか？」

「…崎田くん、いいかげんにしてよ」

プレゼンを前にして、心臓発作で死ぬかと思った。
そう悪態をつくつと、崎田はにこつと笑つてコンビニの小さな袋を私に差し出した。

「オツカレの時には、甘いものがいいんすよ」

色んな種類のチョコレートが詰め込まれた袋を受け取り、
少しだけ気が緩む。

「ダースは？」

「二種類」

「克蘭キーは？」

「もちろん一口サイズ」

「チロルチョコのハバネロ味は？」

「え、そんなんあるんすか!？」

「ないよ。あってもいらないし。」

あはは、と私が笑うと、へへ、と崎田も笑った。

この崎田コウイチという男は、同い年だが会社では一つ下の後輩だ。前髪は短く、茶髪に赤縁の眼鏡。

濃紺のワイシャツに細かいストライプのスーツを着こなす23歳。見た目やしやべり方には、こういう業界特有の軟派さというか、チャラさが前面に押し出ているけど、なかなか気の利く男だ。

「ありがとね、頑張るわー」

「うわっ、なんすかその棒読み」

「え?何を期待してたの?」

私は、元気がないとか誕生日だとかいう理由で、何かにつけこうやって差し入れなどを持ってくるこいつに、必要以上に予防線を張ってしまう。

こういうことをそつなくできるこの男は、相当モテるに違いない。こんなやつを好きになる女は、絶対に泣きを見る。

「さすがユカさん、鉄壁の守りっすわ…」

「はいはい、ほんとありがと。私、プレゼンの準備しなくちゃいけ

ないから」

「あ、あのっ」

「何？まだ何かくれるの？」

「いやあ…プレゼンの後で、いいっす。」

「?…あっそ」

あの時以来、恋をするのが、とても怖い。

好きになった相手に嫌われるのが怖くてたまらないから、私は人を好きにならないようにしてきた。

だから、他人の好意も、可能性だけで恐ろしい。

だから、私は少し崎田が怖い。

怖くて、怖くて、たまらない。

プレゼンは一応、成功した。

“デザートdessert”という名前の4人組のアイドルを結成し、メンバーにそれぞれフルーツのキャラクターをつける。

シーズンに合わせた曲の売り出しやすさ、少女のみずみずしさと果物のイメージの相性等の熱弁を重ね、

私のプレゼンは終始つつがなく終了した。

会議室からオフィスルームへ戻る廊下に、崎田が立っていた。

「崎田くん、何してるの？」

「あ、ユカさん。プレゼン、どうでした？」

「別に、ふつうよ。特に問題なく終了」

「そっか、そりゃあ良かった」

いつもの余裕で軟派な態度とは違い、落ち着きなく手を動かして、天井を仰いだりうつむいて足元を見たり、どこか恥ずかしげなそぶりでしゃべる崎田は、違和感の塊だった。

「何、なんか、変だよ崎田くん」

「えー！？まいったな…ど、どこがっすか？」

「どこが、って…全部」

「きついなーユカさん…俺、それでも結構覚悟してきたのに…。じゃあ、あの、聞いてください」

待って。

「俺、入社したときから」

言わないで。

「ユカさんのこと」

聞きたくない。

「ずっと好きでした。俺と付き合ってください。」

私はきつと、こう答えてしまうから。

「はいよ」

きつと、逃げ出したいくらい恐ろしい「恋」に、足を踏み入れてしまふことになるから。

(2) あいまいな感情

なんでこんなことになってしまったんだろう。

「で、なんでそんなことになったわけ？」

崎田に告白されてから1週間後の夜、
私は、職場近くの立ち飲みビールバーで、同期の安藤貴也あんどうたかやに泣きついていた。

「わかんないのー、緊張してたのー、なんか、昔のこととかいろいろ思い出しちゃったのー!!」

厄介なことがあった時のアルコールは、いつもよりも早く回る。
2杯目のビールを半分飲んだところで、私はすでにデキあがっていた。

「まさか、まさか告白してくるとか思わないもん、なんで!?!? どうして!?!?」

「前から思ってたけど、ユカってさあ…、甘いよね、発想が」

「どうして!？」

「うるっせーよ、もう…」

私は、酔うとつい大声が出てしまうという厄介な癖がある。

幸い、そのビールバーではサッカー中継がかかっていて、店内は全体的に騒がしいのであまり目立たないで済んだ。

「あたし、恋愛経験ないじゃん？」

「そうだね」

「だから、告白とかされると、緊張して、「はい」って言っちゃうの、とっさに」

「とっさに~~~~~?」

貴也は信じられないという顔で私を睨んだ。
もう謝るしかないというくらいの呆れ顔だ。

「…ごめんなさいー」

「俺に言うなよ」

貴也は、この会社で唯一の同期で、なぜか私は貴也に何でも話してしまう。

人間關係の悩みも、日々の些細な不満も、性の疑問も、何気ないことをまず最初に話すなら貴也を思い浮かべるくらい、仲が良い。

というか、仲良くしてもらっている。

私が弱音を吐くたびに、面倒見のいい貴也に慰めて檄を飛ばしても
らう、そういう関係だ。

「で、どうすんの、**崎田**は」

「…どうしよ」

「てめ、自分で考えろよ！自分でまいた種だろー？」

「だってー！」

「まあ、俺の勘だけど、
崎田は本気だよ」

「…そう思う？」

「そう思うね」

ごくごくとして三杯目のビールを飲み干して、貴也は大きなげっぷをした。

「貴也、げひん……」

「好きでもないのに勢いで男と付き合うやつに言われたかねーよ」

「…ごめんなさいー」

「しかも、オツケーした翌日から完全にシカトかましてるようなやつにな」

「……ごめんなさいー……」

その通りだった。

崎田の告白を受けて、あまりの緊張とパニックから、私はその場から逃げ出してしまった。

オフィスに戻ってからでも崎田を徹底的に避け、しゃべる機会を持たないように必死だった。

そんな状態のまま、1週間過ごしてしまい、ここ最近は崎田も私に話しかけなくなった。

あまりにも不自然な私を訝しんだ貴也が呑みに誘ってくれたのだ。

「で、どうすんの？」

「…うん」

「好きなの？ 崎田のこと」

「………嫌い」

「嫌いなのか！？」

「じゃない」

「どっちだよコラ」

「嫌いじゃないの！！！！」

「だからうるっせーっての」

「わかんないよう、そんな、会って半年だよ！？しかも普段呑みにも行ったことないような会社の後輩だよ！？わかるわけないじゃん！」

「仕事以外の決断力、無に等しいな」

「そんないじめないでよ貴也せんせー…いつもみたいにこう、優しくね？」

「ダメだね。今回は他人も絡んでるし、ちゃんとしろ」

だってわかんないものはわかんないもん。

とっさに「いいよ」と言ってしまったものの、

自分の気持ちを考えたことなんてほとんどなかった。

考えたことのあることなんて、ひとつだけ。

『恋は怖い』

「怖いよ、恋は」

貴也は何も言わずに、運ばれてきた4杯目のビールに口をつけた。

「あんな思いをするのは、嫌だよ」

ごくごくと勢いよくビールを流しのみ、3分の2ほど飲んだところで、

貴也はタン！とグラスをテーブルに置いた。

「まあ、今お前は同じことを崎田にしてるけどね」

貴也の言うことはいつもの確だ。

私は、自分が一番されたくないことを崎田にしまっている。

でも。

でも！

「とりあえず、崎田と会え。会って話せ」

「…いつ？」

「今」

「今!？」

「遅らせたってしかたねーだろ、今、会え。それで全部話せ。」

「む、む、むむ無理」

「うるせー早く連絡しろ」

「だって連絡先、知らない」

「はあ!？ そんなもしらねーの!？ あいつもよく告白したな…」

じゃあ俺がかけるからな、と言って貴也は手際よく携帯を操作し、あっという間に崎田につながってしまった。

「おー崎田? お前今どこ? 家? 今すぐ出てこい。会社の近くのバーだよ、それぞれ。」

あ? なんでか? ドラマ見てる? どーでもいいよ今すぐ出てこい! ユカが泣いてンからだよ!!」

豪快に舌打ちして貴也は電話を切った。相当酔っぱらっているようだ。

貴也は、酔うとどんどんガラが悪くなる。

「電話切りやがった」

「貴也、崎田くん、なんて言ってた？」

「なんて言うも何も、『ユカが泣いてる』って言った瞬間、電話切られたよ」

「…来るって？」

「しらね。来ないかな？」

にやにやして面白がるなんて、今夜の貴也はほんとに意地が悪い。品もない。

ガラも悪い。

頼りにしてたのに甘えさせてくれない。

貴也なんて、貴也なんて！！！！

「ユカは、ちょっと極端すぎるよ」

貴也の話なんて！

「初恋のそいつがどんな奴だったかしらねーけどさ、そいつだけが男じゃねえだろ」

わかったようなこと言って！

「傷つくのなんて当たり前だよ、生きてんだからさ」

急に金八先生みたいなこと言って！

「でもさ、ユカは、傷ついても損しても、それでも知りたいと思うこと、ないの？」

崎田に1ミリも興味がいないのか？あんまり難しく考えんなよ。

ちよつとでも知りたいと思うなら、飛び込め。そっから考えろ」

「もう、マスターっ！！ビールおかわりっ！！！！」

「ユカさん！！！！」

やけ酒を注文したら、ビールよりも先に崎田が現れた。

反射的に逃げ出しそうになる私の腕を、貴也がテーブルの上で押さえる。

走ってきたのか息を切らせてこちらを見る崎田の、メガネがちよつとずれてて、思わず笑ってしまった。

(3) バンザイ！好きでよかった！

息を切らしてこちらを見る崎田の目を、じっと見つめ返していた。いつも収まるべきところにきっちり収まっているメガネが、少しだけ右上がりになぜかずれている。ありがちなコントみたいにな。

「メガネ…」

「え…？メガネ…？」

「綺麗にずれてるね…」

あの告白以来、一週間ぶりに交わした最初の言葉がそれだった。

「そこかよ！！」

「ご、ごめんなさいっ」

ガラの悪くなった貴也が豪快にツツコんだ。あたしはぺこっと頭を下げたが勢い余ってテーブルに頭をぶつけてしまった。

ゴン！！と鈍い音がして、一拍遅れておでこの中心に鈍い痛み。

「コントかよ!!!!」

「ぶっ…もう、なんなんすか、いったい…」

ユカさん泣いてないじゃないすか、安藤さん。

苦笑いする崎田の息は、だんだん整い始め、こちらに近づいてくる。まだテーブルの上で貴也に押さえられている腕が、びくつと震える。貴也は、そんな私をちらっと一瞥しただけで、変わらずビールを飲む。

「ていうか早すぎじゃね? 崎田」

「俺の家、会社から徒歩5分っすから」

「へーそいつはいい。じゃ、俺は帰るから」

「へっ!!!? 貴也帰っちゃうの!!!!!!!?」

「これ以上俺がすることも、言うこともねえし」

お願いだから帰らないで!!!!!! とスがる思いで貴也を見つめても、何も響いていないようで、

飲み干したグラスを置いて貴也はちよいちよいと指で崎田を呼んだ。

「あとは、お前が何とかしろ。この女は死ぬほどめんどくせえぞ。覚悟しとけ」

それに、こうやって押さえとかねえとすぐ逃げんぞ。

そう言って、私の腕を崎田に手渡した。

了解っす！オツカレしたー！いつものヘラヘラした笑いを見せる

崎田は、何もなかったみたいにもいつも通り。

まるで、何もなかったみたい。

「で、この前のことなんすけど」

そんなわけなかった――――！！！！

何にもないわけなかった！！

私、こいつのこと避けてたんだった！！！！！！

「ごめんなさいっ！！！！」

謝り倒すしかない。もう考えもまとまらないし、逃げ場もないし、ほかに言う言葉がない！

怒られることを覚悟で頭を下げると、崎田はうんともすんとも言わない。

いつものような軽薄な笑いもない。

恐る恐る頭を上げると、崎田は泣きそうに苦しそうな顔をしていた。何かを考えているように眉根を寄せて、しかし私のほうをじっと見て、崎田は言った。

「どういう意味？」

「…えっ、と」

「それはこの一週間無視し続けたことに対して？それとも、俺の告白をはずみで受けたことに対して？」

崎田は、すべてわかっているみたいだった。

私の迷いも、ずるさも、そういうどうしようもないところ丸ごと、全部わかっているみたいだった。

「どうしてわかるの…？」

「本当にそうなの…！」

「わかってたんじゃないの…！！？」

「わかるわけねーだろ他人の考えてることなんて…！！」

ユカさんに一週間無視され続けて、俺がどれだけ悩んだと思ってるの…？

その間死ぬほど考えたんだよ！ユカさんのこと考えて、それだけで頭いっぱいだったんだよ…！！」

はー、まじかよ。

そう言うと、崎田は私の腕を押さえているのと反対の手で自分の眉間のあたりを押さえた。

でも、そうなんだ。

私がわからないのと同じように、崎田もわからないんだ。

「わかんねえよ、ユカさんの考えてることなんて。どんだけ考えても、わかんなかったよ。」

今の崎田の表情に、いつもの軽薄なところなんて一つもない、と言いたいところだけど、平均よりも短い前髪や、細い赤縁の眼鏡や、何気なく来ている部屋着のこじやれた感じが、どうしても軽薄に見えてしまう。

「だから、教えてよ、ユカさんの考えてること。あと」

「あと…?」

「俺のこと、本当はどう思ってるのか、ってこと」

やっぱり心読めてない? 崎田…。

「怖い」

「俺が?」

「崎田も、怖いし、何より恋愛ってものが、怖くてしかたないの」

「なんで？」

「あたし、恋愛って、ほとんどしたことないの。23にもなって恥ずかしいんだけど、本当にダメなの。」

昔、ちよつとあって、人に見れば大したことないっていうのもわかるんだけど、怖いもの。

理屈じゃなくて、怖くて怖くていつも逃げ出したいくらいなの。また人を好きになって、自分の心が自分のものじゃないみたいになって、

しかも粉々に壊れてしまうかもしれないと思うと、そんなに恐ろしいことなら近づきたくないって、そう思っちゃうの。それに…」

「それに？」

「崎田はたぶん、モテるから…」

「俺、モテないよ？」

「嘘だ！」

「いやいや光栄だけでも…告白されたことなんか小学校の時に1回きりだし、まあ女友達は多いほうだと思うけど、それはたぶん姉ちゃんの影響だし」

「崎田、お姉ちゃんいるの？」

「いるよ。上に2人。俺なんかよりよっぽど怖えよー姉ちゃんは。百戦錬磨の恋愛ソルジャーって感じ」

「それは、怖いね…」

「そうでしょ。で、肝心のところなんだけど」

無意識にか、意識してか、私の腕をつかむ手の力が、少しだけ強まる。

「俺のこと、本当に怖いだけ？」

私を見つめる、崎田の目の強い力。

目を逸らすこともできない。

私の知らない崎田が、確かにそこにいる。

「ユカさんにとって、俺は、本当に怖いだけの存在？」

貴也の言っていた言葉がよみがえる。

『ユカは、傷ついても損しても、それでも知りたいと思うこと、なの？ 崎田に1ミリも興味がないのか？』

「わかんない…」

「考えて」

「考えられない…」

「考えたくない？」

「崎田は、怖くないの？」

「そりゃあ俺だって怖いよ。怖くてちびりそう。ユカさんに告白した時も、足なんかぐくぐだったし。

でも、俺は確信があったからね。もう大津波が起こって世界中が洗い流されて世の中がひっくり返っても間違いないってくらいやつが」

「どんな確信？」

「俺が、ユカさんのことが好きで好きでしかたねえっていう、確信」

この男は、計算してるのか、バカなのか。

そういうこと、さらっというから軽薄に見えるのに。

でも、白けるどころか、私の心臓はドキドキと高鳴っている。

まるで自分のものじゃないみたいに。

「ユカさんが俺のこと、何とも思わないって言うならそれでもいい。邪魔だっというなら近寄らない。」

でももし、邪魔じゃなくて、いないよりはいるほうがいいって、その程度でさえ俺のことを思ってくれるなら」

過去の痛みが、一瞬振り返して、私の胸に広がる。

だけど、それは崎田がつかむ右腕のほうへ流れて、ゆっくりと体から抜け出ていった。

残ったのは、冬の夜を走ってやってきた、崎田の手の熱さだけ。

「ユカさんのそばに、いさせてほしい」

何も考えられなくなった頭で、崎田のことを考えた。

頭の中でそこだけ花が咲いたみたいに、明るい。

私は泣いて、自分をつかむ崎田の手に左手を重ね、くぐもった声でうなずいた。

うん。

うん。

ありがとう。

「泣いたって聞いて駆けつけたのに、俺が泣かすとはねー」

どこか満足そうな崎田の声が腹立つ。

こいつの余裕が気に食わない。

でも、私の知らない崎田が、まだまだいるに違いない。

腕の熱さと少しの好奇心が、私を外の世界へ押し出した。

もう戻れない、と思うと、やはり怖い。

だけど、そこには崎田がいる。

私の腕をつかんで離さない、崎田が。

(4) 愛の病

「へー、その香水 a n t i c i p a t e d で買ったんだー！ちよっと近づいて」

近づきすぎ！！

「スイーツみたいな匂いだわ、真知子ちゃんに似合ってたね」

またそうやって気を引いて！！！！！

「え？明日のランチ休憩？いいよーどこ行く？」

もー！！！！我慢できないっっ！！！！！！

「来宮^{きのみや}さん、午後の会議の書類に目を通してくれますか」

「えっ、はい、安藤さん」

手に握りしめていたミニ低反発クッションを千切り潰しそうになっ

たとき、

会社でめったに話しかけてこない貴也が書類を差し出した。

はっと我に返り、営業スマイルを取り戻した。

午後の会議？

貴也と一緒に出る会議なんてあったっけ？

覚えのない書類の上には太めの黄色い付箋が貼っており、小さな文字でこう書かれていた。

『鬼みてえな顔してんぞ』

もういや！！

「崎田はああやって暇さえあれば女の子に声かけてデートの約束してへらへらベタベタして！」

地下一階の人気のない給湯室で貴也と向き合い、私は思いのたけをぶちまけていた。

成り行きとはいえ付き合い始めて一か月、以前よりまめに連絡を取るようにはなったものの、

私と崎田の間に恋人らしい進展は全くなかった。

それに連絡といっても、夜に15分程度電話で話すくらいだ。

最近は来季の異動に伴う引き継ぎのせいで忙しく、その連絡もすれ違ってばかりになった。

私が早く上がった時は崎田は残業をしていたり、崎田からの電話が来たときにはもう眠ってしまっていたり。

なのに会社に来れば崎田は違う女の子をデートに誘うし、見せつけるようにベタベタするし!!!

私は我慢も限界に来ていた。

「でも、あいつがチャライのは今に始まったことじゃないだろう？」

「そうだけど!!! 仮にも彼女の前であんなことしないでしょ!!!」

「それもお前が『秘密にしてくれ』って言ったんだろ？」

「そうだけど!!!!!!」

確かに、私たちが付き合い始めたことは、社内に明かさないことにしよう、と言ったのは私だ。

それはオフィスの中で浮ついた目で見られるのが嫌だったからだ。

それに、崎田は社内ではちよつとしたアイドルだ。（アイドル事務所で言うのも変な話だけど）

この職業は人間関係が生命線だ。誰の協力も欠かせない。そういう社会で、女の子たちの噂話は脅威的な力を持つ。

『彼女だ』なんて言って余計な波風を立たせたくないし、そんなことで仕事ができなくなるのはごめんだ。
私はこの仕事に、結構気に入っている。
極力仕事の邪魔はされたくない。

「そういう態度がやつを不安にさせてるんじゃないのか？」

「だって、仕方ないでしょ？働いてるんだし」

「そうだねえ。『あなたと付き合うことは仕事的にはマイナスよ』
ってはっきり言うのも、愛かもねえ」

「いや…、そんなつもりじゃ…」

この話をした時の崎田の表情で、薄々感じてはいた。
彼を傷つけないように、もっと慎重に話すべきだったということ。
だけど、崎田は同意してくれたし、他には何も言わなかった。
この方法が自分たちにとって、一番良い方法だと言ってくれた。

「まあ、そう言うしかないだろうな。付き合ってもらってる身としては」

「そんなっ…！」

「だってそうだろう？ユカはあいつに好きだなんて一言も言ってないんだから」

「それは、別に特別な意味が、あるわけじゃなくて」

「特別な気持ちはないから、言えないんだろ」

貴也の言葉に私は慌てた。こんなつまらない誤解はされたくない。
特別な気持ちはない、なんて。

「違うよ、ただ、なんていうかこう」

「なんだよ」

「……………恥ずかしくて」

「乙女か!!!!!!!!!!」

「悪いっ!?!あたしが乙女で!!!!!!!!!!」

「はは、ひーっ、いや、あの、仕事サイボーグだのなんだのと言われていた来宮ユカ次期主任がねえ…ひっひ」

体を折り曲げ、腹を抱えて大笑いする貴也を見て、

貴也なんかに言うんじゃなかった!?!と、こんな話を貴也にしか言えない自分の付き合いの悪さを呪った。

貴也の言うとおり、こんな事態になる前は、私は仕事のことしか考えていなかった。

まだまだ下っ端だけど、社内が一番残業もしていたし、営業で回った場所数も断トツだ。

かわいい女の子を誰よりもかわいく飾って、みんなに認めてもらうこと。

それが自分の喜びだった。

初恋以来、恋を遠ざけてきたせいで、女の子らしいことともほぼ無縁だったから、

かわいい女の子たちを見るたびに、今とは違う自分の人生を重ねていたのかもしれない。

でも、崎田が現れたせいで、私の人生は、少しずつ変わってきた。

「とにかくっ！もう我慢の限界なのっ！もう見てらんない！！」

「それで？」

「それでっ、て……」

「それで、はそれでだよ。どうするんだ？」

「どうするって…」

「崎田に言うのか、言わないのか」

「……言えないよ、こんなこと…」

「出たよ優柔不断女」

「ねえ、この前から思ってたけど、貴也最近あたしに厳しいよね？」

「ユカは最近だらしねえよな」

「そんなことない！」

「いや、あるね。俺はユカの決断の速さとの確さは割と尊敬してたんだぜ？」

仕事だけじゃない。仲の悪いスタッフの間に入って仲をとり持てば、宴会の段取りは完璧、男女ともに信頼されるスーパーサブの来宮ユカが、お前だろ？

それがあんなチャライ男が絡んだだけでこうなるとは、つくづくわからんもんだな」

私もつくづく、自分がわからない。

私はもう以前の私じゃない。

以前なら言いたくても言えない、そんなことはなかった。

必要だと思えば身を切るようなことも言った。涙を飲むようなことも耐えられたし、泥をかぶっても平気だった。

でも、今は、崎田に何か言おうとしても、当たり障りのないことしか言えなくなってしまった。

崎田が解いてくれたように思っていた恋愛に対する恐怖は、無くなったように思っている、私の中にしつこく残っているのだ。たまらなくなつてテーブルの上で組まれた指先を見つめる。

「そう思いつめんなよ。今回もお迎えが来たみたいだぜ、ほら」

地下に下りる階段の音が近づいてくるにつれ、足元から姿が現れた。見覚えのあるブラウンの革靴に細身のスラックス。

階段からまっすぐこちらに歩いてくる表情にさっきまでのへらへらした笑顔はない。

「ユカさんお借りしたいんですけど、ちょっといいですか？」

貴也がにやにやしながらこの給湯室を去って行ったあと、いつも笑っている崎田が笑っていないので、私たちの間には気まずい沈黙が流れた。

「安藤さんと、何話してたんすか？」

いきなり核心を突かれた。
こういうところがあるから油断できない、崎田って。

「何って…何も…」

「何もないけど、こういう人気のない場所に来るんすか？誰とでも？」

「そういうわけじゃないけど…」

「じゃあどういいうわけがあるんですか？」

まるで尋問をされているような口調には、心底頭にきた。
まるで私にやましい所があるかのような言い方だ。

しかも、自分には何もやましいところが無いみたいに！
自分はあるなにどうどうと女の子をナンパしておいて！？
私はついに堪忍袋の緒が切れた。

「会社内のどこで誰と何しようが、あたしの勝手でしょ！社内のいたるところで女の子ナンパしてるような人に言われたくないわよ！
！」

「そんなの、今に始まったことじゃないじゃないすか！」

「自分で言う！？そういうこと！」

「俺には俺なりの付き合い方ってもんがあるんすよ！急に変えたらみんな怪しむに決まってるじゃないすか！それに俺が、何のためにこんなことしてると思うんすか！！」

「何のためよ！言ってみなさいよ！たくさんの女の子とご飯食べるためでしょ！」

「ユカさんに嫉妬してほしいからだよ！！！！！」

ああ、今の俺死ぬほどこっこ悪い。

呆然と崎田を見つめる私の前で、癖のように眉間を抑えた。

崎田が私の前でこんな風に頭を抱えるのは、いったい何度目だろう。私はいつも、崎田の気持ちが変わらなくて、崎田を傷つけてしまう。

「なんでそんなこと」

「俺だって、不安なんすよ」

絞り出すような声に、私の怒りは急速に冷えて行った。
貴也の言ったとおりだった。

私が思っている以上に、崎田は不安を感じていたのだ。

「どうすればいい？」

「え？」

「…どうすれば、崎田の不安を消せる？」

今度は、崎田が呆然と私を見返した。

「これ、夢すか？」

「夢じゃない」

そう言うと、崎田はきよきよ周りを見回したり、頬をつねったり、突然挙動不審になった。

「じゃあ、えっと、あの、そうっすね、どうしよっかな、え？あ、ここ会社っすよね…」

「どうしたの？」

「いや、これが都合のいい俺の妄想じゃなかったら、こんなこと言ったら呆れられると思って…」

「なんで？」

「だって、いつものユカさんなら、『そんなつまらないことを考えてたの？』って言われるかなーと…」

「…そう言ってもいいけど」

「いや、今のユカさんでお願いします！！ぜひそのままで！！！！」

そうっすね…、と崎田は探偵のように顎に手を当て、私を見た。そして思いついたように目を見開いた。

「名前」

「名前？」

「はい。名前で、呼んでください」

「名前って…、コウイチ？」

「そうっす。それで、俺を今日のディナーに誘ってください」

「ディナーって、なんのためにあたしがそんな風に！」

「俺のために」

崎田は、私が照れ隠しに後ろに回した手を探り当て、しっかりと握った。

握られたての熱と、期待に応える気恥ずかしさで、心拍数が跳ね上がる。

「コウイチ」

「目を見て」

「…。コウイチ」

間近にある崎田の、コウイチの顔は、いやに艶っぽく、知らない男のようだった。

伏し目がちになってしまいう自分を奮い立たせて、なんとかセリフを

吐きだす。

「今夜」

「はい」

「ご飯を食べない？」

「：できれば、もっと色っぽくお願いします」

「色っぽくって…」

熱でくらくらし始めた頭に、コウイチがささやきかける。
なんて言っているのかわからない。

「コウイチ、今夜…、…ずっと一緒にいない？」

「喜んで」

そういうと、コウイチの腕に引き寄せられ、瞬きの瞬間にキスをされた。

一瞬何をされたのか分からず、何をされたのか分かったころには、私はコウイチの腕の中にいた。
初めて抱きしめられた男の人の体は硬く、熱かった。
そして少しだけ苦しい。

「でも、意外」

「何が？」

「コウイチって、もっと余裕のあるほうだと思ってた」

コウイチは私の耳の横で短く息を漏らして、自嘲するように笑った。

「俺も、そうだと思ってたんすけどね…」

どうやら、変わり始めたのは私だけではないようだ。

私たちは、少しずつだけど確かに影響し合い、お互いに変化している。

そのことが私を、そしてコウイチを、なんとなく安心させた。

「あと、安藤さんと二人っきりになるのは、できるだけやめてく
ださい」

「貴也は友達だよ？」

「それも。名前で呼び合う二人、っていうのが、さらに面白くない
っす」

初めて男の人に嫉妬された私は、コウイチの気持ちがなんとなくわ

かった。

嫉妬されるのは、うっとおしいかもしれないけど、かなり、嬉しい。抱き合う体の熱さが、そのまま気持ちの熱さみたいに感じられる。こんな風に伝わる気持ちがあることを、こんな喜びがあることを、私は知らなかった。

私は、私に向けられた言葉と体を抱きしめなおた。

「好きだよ、コウイチ」

コウイチも、そんな風に感じてくれているといい。

(5) KANSHATE

未だかつて、俺の歴史にこんなことがあったか？

女の子をデートに誘うっただけで、唇が震えるほど緊張するなんて付き合ってもらえるというだけで、なかなか眠れないほど興奮するなんて。

デートに誘うことや、女の子と付き合うことがはじめてなわけじゃない。

もちろんいつだって断られる可能性はあったし、断られることだってあったけど、

「断られたらどうしよう」なんて思ったことは一度もなかった。

デートに誘うとか、声をかけるなんて、女の子を女の子として扱うマナーみたいに思っていたから。

好きな女の子はたくさんいた。というか女の子は基本的にみんな好きだ。

姉が二人いるせいもあって、女の子のほうが感覚が近いと思ってるし、理解できる。

友達としても恋人としても付き合いやすい。

今も大して変わらないはずだ。

来宮ユカ、彼女を除いては。

もう何週間も前から、俺は明日のことで頭がいっぱいだっただ。

明日は付き合い始めて三か月目の記念日。

俺が清水の舞台から飛び降りるおいで彼女に思いを告げてから、ちようど三か月経った。

しかも、明日はユカさんの24歳の誕生日。

二人が付き合い始めてから最初の誕生日だ。

「コウイチ」と呼んでくれるようになったものの、まだまだ俺たちの間には距離がある。

これは、二人の距離をグッと縮めるまたとないチャンス!!

実は、名前を読んでくれた夜、ユカさんはシャンパンで酔いつぶれてしまい、結局何もなかったのだ。

そして、それ以降なんとなくユカさんは剣呑な雰囲気で、夜のデートに誘える雰囲気じゃない。

俺はどうやって彼女の気持ちをほぐしていいのかわからず、当たり前障りのない会話をつづける日々。

正直、俺は限界だ。ユカさんはどうなのだろう。

「と、言うわけで、プレゼントは何がいいすかね？」

「俺に聞くか？ほかにテキトーな女がごろごろいるだろ」

オゴります、いや、オゴらせてくださいと頼み込んで、めんどくさいという態度を隠しもしない安藤さんをいつものビールバーに誘った。

俺としても、ユカさんのことを男に、しかも安藤さんに聞くのは不本意だ。

しかし今は背に腹は代えられない。

「…癪っすけど、安藤さんほどユカさんのこと知ってる人間は、…今のところ思いつかないんすよ」

「知ってるったってなあ…。最近あんまり話してねえから、欲しいもんとかもわかんねえし」

「え、そうなんすか？」

「お前が言ったんじゃねえの？『二人になるな』とかなんとか」

「いや、…ああ、まあ、言いましたけど」

「この前飲みに誘ったら、そう言って断られたよ。ユカは会社じゃあの通りだし、もともと連絡もマメなほうじゃねえから、大して話すタイミングもないんだよな」

「そう、だったんすか…」

予想外の出来事だった。

確かに「安藤さんと二人にならないでほしい」とは言ったけど、話さなくなるとは思わなかった。

ただ安藤さんの言うとおり、ユカさんは仕事中にプライベートな話をするようなタイプではない。

「だけど、あの時は給湯室で」

「ああ、あんなの初めてだよ。ユカが仕事時間中に相談してくるの

も、あんな風に怒ったのも。変われば変わるもんだな。ちょっと前まで、「仕事が生きがいつ!」、みたいなやつだったのに」

ユカさんは「仕事サイボーグ」という異名を持つ、仕事の鬼だ。

基本的に3、4つの企画を掛け持ちしており、いつも期待以上の完成度に仕上げる。

そのストイックな仕事ぶりを買われて、23歳にして「次期主任」とまで見込まれているのだ。

ユカさんがそういう人だからこそ、心を開いているらしい安藤さんに嫉妬を通り越して憎しみまで抱きそうになったのだが。

しかし、その考えは俺の一人相撲だったようだ。

結果として俺は、俺の早とちりでユカさんから友人を一人奪ってしまったのかもしれない。

「じゃあ、俺はいつたいどうすればいいんすか…」

「お前らさあ、なんかあると俺にすがるのは止めてくんない?」

「俺だってできればすがりたくないっすよ!でも、どうしたらいいかわかんないんすよ。ユカさんは、他の女の子とは違うから」

彼女は、俺の知ってる女の子とは違う。

いつだって冷静で、理論的で、肩で風を切って歩いていて、存在感には言葉にできない重みがある。

スイーツのことに疎くて、小動物が苦手で、笑うときだって高い声ではじけたように笑わず、息を漏らすように落ち着いた笑みをこぼす。

そんな彼女が、何を好んで、何を嫌うのか、俺には全く分からない。

「変わんねえと思うぞ」

「え？」

「ユカも、他の女と変わらねえよ」

「いや、違いますって」

「ユカは、頭も切れるし仕事もできる。顔もイイしスタイルも悪くない。まあ、中々いないような女だな、確かに。でも、それ以外は変わらねえと思うぞ？ 変わらねえどころか、一日メールが途絶えたってだけで不安になって、ベタで大がかりなデートに感激する、わかりやすい女だよ。この前だってお前の作戦にまんまとはまって、すげー嫉妬してたろ？」

安藤さんはあの時のことを思い出してか、可笑しそうに笑った。手の中のグラスのビールを、くるくると揺らしてもてあそぶ。俺の思考も、安藤さんの言葉でくるくると揺れる。

「違うのは、お前の気持ちの方だろ？ 男と女で必要なのは、気持ちを伝えること。そんなぐらいわかるだろ？」

そうやってビールを飲み干すと、ごちそうさん、と言って安藤さんは行ってしまった。

くそ、やっぱり敵わねえ、あの人には。

『好き』って気持ちが大きすぎて余裕がなくなる、そんなことはなかった。

女の子と付き合う時はいつだって、ゲームでもするように、彼女を楽しませたり喜ばせたりして、行為に持ち込むことが目的だった。失敗したらそれまで、データが足りなかった、タイミングが悪かった、次に生かせばいい、そんな風に思って、それ以上気にしたことなかった。

彼女のことを考えるだけで、胸が痛いくらいに高鳴って、今すぐ会いたくてもどかしい気持ちに焦ったりするようなことはなかったんだ。

明日、俺はきっと思っていることの半分も言葉にできないだろう。彼女の笑顔に緊張して、触ることすらままならないかもしれない。でも、彼女を好きだという気持ちだけは、精一杯伝えよう。

物でもなく、言葉でもなく。

(6) 冷たい頬

コウイチは、背が高い。

コウイチは、線が細い。

コウイチは、よく乾かした洗濯物の匂いがする。

コウイチの声は少し高く、しゃべり方は陽気で朗らかだ。

だからコウイチは、あの人とまるで違う。

なのに、コウイチと一緒にいるようになってから、あの人の夢を見る回数が増えた。

場面はいつも同じ。

髪の毛の長い女の子と腕を組むあの人が、物言いたげにこちらを見ている。

私はあの人と向き合って、動けずにいる。

いつも、ただそれだけの夢を見る。

目が覚めて、考える。

今の私があの場合にいたら、やっぱり逃げ出してしまうのだろうか、と。

あの日、秋の夕暮れの中、幼い私がしたように。

休日、待ち合わせた場所になかなか現れないコウイチを待ちながら、オープンテラスで頬杖をついていた。

今日は特に何をするわけでもない。

この前の休日に2人で映画を観て、その前は夕食を食べて家に泊ま

って、その前はプラネタリウムに行った。
お出かけが多かったから、少し落ち着いて、散歩でもしようか、そんな話をした。

ぼんやりと、誕生日の日のことを思い出す。
24歳なんて、節目でもなく、祝うでもなく、過ぎていくものだと思っていた。

それこそ取り立てて想像したこともなかった。

コウイチとの時間は、幸せそのものだった。

つないだ手や、触れ合う肩の熱、照れ笑いすると必ず鼻の頭を掻く癖、ぼそぼそと、細切れに語られる言葉。

「ユカさん」

「うん？」

「俺、さ」

「うん」

「ユカさんがいてくれて、よかったよ」

「…うん？」

「…また今度、詳しく話すよ」

あの日のコウイチはなんだかすごく緊張していて、
言いたいことは分かっているのになかなか言葉が出てこないようでもじもじしていて、

まるで女の子みたいだった。

きっと家族の中でも、コウイチが一番乙女っぽかったんだろなあ。
コウイチのお姉さん、どんな人なんだろう。

百戦錬磨っていうからには、バリバリのまつ毛にすごいボリューム
の巻き髪、戦闘力抜群！みたいな？

コウイチ、生まれたところから尻に敷かれてたのかな。

取り留めもないことを考えながら一人で含み笑いをしていると、名
前を呼ばれた。

「ユカ？」

顔を上げると、そこにあったのは、

「…慎司」

幼い私が逃げ出した、あの顔。

どうしてここにあるのだろう。

私に戸惑って、何かを言い出しそうで、思わず逃げ出したくなる、
顔。

でも、束の間に破顔する。くしゃつとして丸くなる笑顔。懐かしい、
と思った。

「久しぶり」

「…何年振り？」

「中三の秋だから：俺は、15？8年、9年？ほぼ10年か。そうなるともう一昔前だな」

泣きそうになる顔を伏せて、目を瞬いてどうにかごまかす。

ふたをしていた思い出が、勢いよく溢れ出す。

よくおしゃべりした公園、掃除当番でゴミを捨てに行くときにすれ違った校舎の裏、イヤホンを分け合って聴いた曲、遠出をした電車の窓から見えた景色。

「…何で？何してるの？」

「あ、ああ用事があるんだ。ちょっとな」

座ってもいいか、と聞いて向かいの椅子に腰かける慎司の、優しさに気づいてる。

あの頃から、そういう人だった。

何も言わないけど、すべてをわかっているように動く。

私がどうしてほしいのかを知っていて、いつも先回りして、用意してくれていた。

今だってそうだ。

放っというて行ってしまえばいいのに、泣いている私を一人にできない。

「コーヒーください。2つ。ミルクと砂糖は…いらないです」

私の趣味だって覚えてる。
その優しさが、私の期待を叶えてくれる優しさが、時折すごく苦し
かった。
わがままを言いたくないのに嬉しくなってしまう自分が苦しかった。
今も、苦しい。

「なんか、変な感じだな。タイムスリップしたみたいだよ」

走って逃げだしたあの瞬間から、止まってしまった私たちの時間が、
切って貼られたようにここから始まった。そんな風に思えた。
あの時のもどかしさや、恥ずかしさや、後ろめたさが、体の中を暴
れまわっている。

でも最もやっかいなのは、恋しさ。

混乱する感情の中で、コウイチの名前を呪文みたいに唱える。
ひっくり返ったおもちゃ箱のように、秩序も落ち着きもなくなっ
てしまった思考を、

呪文で現われたコウイチが一つずつ片づけていく。
そうだ。

コウイチ。

私は今、コウイチを待っている。

今、恋人のコウイチと会えるのを楽しみに待っている。

混乱する必要はない。

目の前にいる慎司は、10年近く前のただの「思い出」だ。

私はその間、彼という「思い出」と、ずっと向き合ってきた。

あの時逃げ出してしまったから。

今なら、もう、大丈夫。

彼自身とだって、向き合えるはずだ。

私はもう年端もいかない女の子じゃない。

「誰かと待ち合わせ？」

「…うん」

「じゃあ、そんなに長くはいられないな」

「え？」

「なんていうか、気まづくないか？説明、しづらいだろうし」

慎司の中には、慎司の思い出がある。

それは、いったいどういう形で残っているんだろう。

「ぜんぜんっ？もう、いい思い出だよ」

「言うなあ」

少し気遣って、けれど柔らかく笑う慎司を見て今なら過去にできると思った。

どんな顔をするんだろうという、意地悪な気持ちもあった。

強がりついでに、言ってやろうと、軽はずみな気持ちで、いかにも気にしていなさそうな口調で。

「浮気現場に鉢合わせして、それっきりっていう、ありがちな思
出」

口に出して言えば心臓はドキドキするし、まだ、コウイチには言っ
ていないけれど。

何でもない事のように話そう。今日であれば話せる。

流れ出した過去の時間を、ありのまま。

それなのに、流れていくだろうはずの時間が、少しだけ止まった。

「やっぱり…、…浮気だと、思ってた？」

「思ってたよ？」

「そうだよなあ…」

だいぶ片付いたおもちゃ箱の中から、一人の少女が現れる。

押し戻そうとするコウイチを飛び越えて、こちらへ向かってくる。

彼女は言った。

あの時、慎司に言いたかった言葉を。

「…やっぱり、違うの？」

慎司が語った過去を、わたしはただうなずいて聞くしかなかった。
髪の長い、顔だちの整った従妹のこと。

叔父家族が長い海外出張から帰ってきて、何年かぶりに再会したの

で遊びに出かけたこと。

ありがちな話。

些細な誤解。

簡単に解決できたいくつもの問題。

もう、終わってしまった話。

「誤解を解こうと思っても、あれから、口もきいてくれなくなっちゃったもんな」

「ごめん」

「いいよ、何年前だと思ってるの？…一昔前の、思い出話だろ？」

「でも、ごめん。ごめんね、慎司。過去じゃなかったの。誰にも話せなかった。ずっと気にしてたの。あの時、慎司にぶつかっていったら、ちゃんと話していたら、あたしこんなに、引きずらなかったと思う。でも、聞けなかったから…怖かったから」

喋りだせば、止まらなかった。

気持ちも、涙も。

あの時の思い出は、ただの過去ではなかった。

「今」の私の、一部だ。

「怖かったって、何が？」

「…あの時、初めて気づいたの。慎司のこと、すごく好きになってるって。でも慎司は、そうじゃなかったかもしれないって、知るの

が怖かった」

「バカだなあ、ユカは。聞いてくれればよかったのに」

止まらない涙を、立ち上がった慎司の右手がすつと拭う。

あの時は見せたことのない大人びた表情で、私の目を見る。

「そしたら、好きだって言えたのに」

「慎司？」

「ああなつたのは多分、ユカだけのせいじゃないよ。俺は、ちよつとあれなんだ、強引さってやつ？足りないんだよ」

思い出したように笑う慎司は、この場面にしては清々しく笑う。

「…俺も、怖かった。もう口もききたくないくらい嫌われてんだ、って思ったら、決定的な言葉を言われるかもって。すげえ、好きだったんだ、ユカが。『嫌い』なんて言われたら、生きていけないくらい。たった15のガキのくせになあ」

「あたしも、すごい好きだったよ、…慎司が」

お互い様だな。

そんな言葉で頭を搔いて、慎司は伝票をもって歩き出した。

「慎司！」

「待ち合わせ、彼氏とだろ？先に失礼するわ」

「…どうしてわかるの？」

「座って待ってる時の顔、見覚えあったから。いつも待ち合わせの時、そんな顔してたよ」

今まさに、過去になろうとしている思い出を、私は手繰り寄せたかった。

でも思い出へ続く糸は切れてしまっていて、とても速く遠ざかっていく。

この手に取り戻したところで、どうするのだろうか。

私に何が言えるのだろうか。

過去は変えられない。

私はコウイチが好きだ。

大好きな慎司は、私の「思い出」だ。

どんなに胸が苦しくても、解決する方法はない。

どんなに引き止めたくても、それはできない。

私にできることは、ただ、感謝することだけだ。

慎司がいてくれたからこそ、手に入れることのできた「今」に。

「ユカさん！ごめん乗る電車、乗る電車で遅延してさ…、あれ？誰かいたの？」

空っぽの席に置き去りにされたカップを見て、コウイチが不思議そうに言う。

呆然としていた私は、現われた本物のコウイチを見て慌てて取り繕うとしたけど、思い直した。

こんな時に、コウイチの前で、自分を取り繕うなんて馬鹿げていた。私の思っていることなんか、コウイチはすぐに見抜く。

私がしなければいけないのは、しっかりと伝えることだ。

「うん…昔の、…思い出がね…」

「思い出？」

「今、話すよ。ゆっくり聞いて」

泣いてばかりでまともに話せないと思ったけれど、
自分で想像していたよりはずっと上手に話せた。

コウイチは目を伏せていたけど、途中から私の手を握り、
槌を打った。

そうか。

上手に話せたのは、コウイチのおかげだ。

コウイチの相槌に合わせて、私はしゃべっていたのだ。

「そうか、そんな過去があったとはねえ」

機嫌が悪くなるかと思っていたけど、コウイチはあっけらかんと
そう言った。

昔の男の思い出を、泣きながら語る彼女を、大したことがない
みたいに。

「何も、聞かないの？」

「何もって？もっと何かあんの？実はよりが戻りましたとか？」

「無いよ！なんにも！何言ってるの！」

「でしょ？」

「…ふつう、気になるもんじゃない？いろいろ…」

「俺さ、結構自惚れてるから。ユカさんは俺のことすっげー好きだと思ってるし。もちろん、俺もすげー好きだよ？だからさあ」

「うん」

「過去は、過去だろ？それで、その全部が、今のユカさんだろ？」

「…うん」

「じゃあ、問題ないっしょ！俺が好きになったのは、今のユカさんなんだから。」

そろそろ出ようか。散歩するなら、日が暮れる前に！」

立ち上がったコウイチは、これ見よがしにずっと左手を前にだし、私は笑いながらその手に右手を重ね、街へ歩き出した。目に見える景色がなんとなく新しく見える。

ここに歩いて来たときよりも、新しくなった私が、コウイチと一緒に同じ道を歩く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7467q/>

POP TUNE

2011年4月28日21時50分発行